


 渋沢翁おうの新1万円札

社会保障言論

お金の稼ぎ方・ 使い方を教える



渋 沢栄一翁が新1万円札の肖像に選ばれ、2021年のNHK大河ドラマの主人公に決まるなど再評価が進む。だが、福祉分野での先駆的な役割を具体的に伝えるメディアは少ない。

ファイランソロピートの 開拓者

2024年度の発行へ向け、日本の近代を切り開いた偉人の歩みを振り返り、業績を再認識するのは意義深い。

渋沢は1840(天保11)年、現在の埼玉県深谷市で豪農の長男として生まれ、明治維新の激動期に波乱の人生を送った。一橋家への仕官、最後の将軍・徳川慶喜の弟に付き添う欧州滞在、帰国後は大蔵官僚、早々に退官して第一国立銀行頭取、その後、500を超える企業や団体、学校の創設・発展に尽くした。

この「日本資本主義の父」と呼ばれる経済活動の実績は広く知られるが、福祉活動の紹介は意外に乏しい。

74(明治7)年、貧民救済の「東京養育院」の運営を頼まれ、補助金打ち切り反

対の先頭に立つ。当時の自由経済の論客は「税金で貧民を養うのは怠惰な国民を育てるに等しい」と主張し、渋沢は「貧民救済は人の道、仁政である」と反論した。

補助金は一時途絶え、渋沢はフランスで見聞した慈善バザーを参考に鹿鳴館で物品陳列販売会を開き、運営費に充てた。資産家が少額でもポケットマネーを出し、社会的な責任を果たす大事を求めた。日本型ファイランソロピー(社会貢献活動)の開拓者だ。

現在いまにつながる 慈善協会

1908(明治41)年には「中央慈善協会」が発足し、渋沢は初代会長に就任し、開会の辞でこう述べた。

「文明が進み富が増すほど貧富の懸隔けんかくが甚だしくなる」「東京養育院は総計五、六百人であったのが今日は千六百人余の入院者がある」。

「協会の発意は、慈善をして、如何にも道理正しく組織的に経済的に進歩拡

張して行きたいといふ考で」「政治と相俟たなければ十分なる効果は得られまい」。

評議員には、後の外務大臣、後藤新平、非行少年を預かる「家庭学校」の創設者、留岡幸助、大阪で方面委員（現在の民生委員の前身）を作った小河滋次郎らが名を連ねた。

中央慈善協会は、現在の全国社会福祉協議会へ脈々とつながり、09年創刊の機関誌『慈善』は、現在、『月刊福祉』として1世紀超の誌齢を重ねる。



渋沢翁紹介の各種記事

東京養育院も明治、大正、昭和を通じ、貧窮者、孤児、障害者らが暮らせる数少ない施設で、渋沢は終生にわたり院長を務めた。その遺志を受け継ぐ板橋区の東京都健康長寿医療センターには、翁の銅像が立つ。

天皇へ直訴の烈々たる気概

大正から昭和へ、第1次世界大戦後の不況、関東大震災、昭和恐慌は庶民の暮らしをドン底に突き落とす。当時の公的な救済は明治初期に設けた「恤救規則」だけだった。

ようやく日本初の救貧制度「救護法」が29（昭和4）年成立した。公的扶助の義務を初めて掲げたが、政府は軍事費優先で予算を確保できない。施行は先延ばしされた。

渋沢は病床にあったが、主治医の制止を振り切り、井上準之助・大蔵大臣、安達謙蔵・内大臣らに膝詰めで実施を迫った。埼玉県代表の方面委員は、「ない袖は振れない」と拒む井上大臣の対応に憤激の余り卒倒・死去した。

全国の方面委員はついに決起し、天

皇への上奏文をまとめる。「陛下の赤子20万今正に飢餓線上を彷徨するを見るに忍びず」。

捨て身の直訴が実際に天皇へ届いたかどうかは不明だが、政府も議員も慌てふためいた。競馬の利益を回す苦肉の策で予算を作り、救護法は32年施行された。同年開催の第1回日本ダービーとの同時出走であった。

渋沢は、その2カ月前、91歳で燃え尽きた。

「恤救規則」による31年の救済人員は3万人余、翌32年の救護法は18万人近くが増えた。もちろん、対象者は徹底的に絞り込まれ、最低所得層以下の「劣等処遇」が貫かれた。それでも第2次大戦後の生活保護法（46年制定）まで、貧窮者は救護法を頼る他なかった。

渋沢は、金融機関や株式会社経営の根底に「土魂商才」の理念を求めた。一方、常に社会の病弊に立ち向かった。身をもって正当な稼ぎ方と適正な使い方を示した生涯と評すべきだ。

宮武剛（みやたけこう）

毎日新聞社・論説副委員長、埼玉県立大学、目白大学・大学院の教授を経て、(学校法人)日本リハビリテーション学舎理事長、NPO「福祉フォーラムジャパン」副会長も務める。